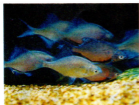


Eコ

市民と一緒にイタセンバラの保護活動に取り組む上原さん

イタセンバラ

いづれも大阪府寝屋川市の府立環境農林水産総合研究所水生生物センター



淀川水系イタセンバラ
保全市民ネットワーク

上原 一彦さん (47)

国の天然記念物「イタセンバラ」は、淀川水系や富山平野、濃尾平野の限られた場所にすむ淡水魚だ。絶滅危惧種のこの魚を守るため、大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター主幹研究員の上原一彦さん(47)は2011年、淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワークをつくった。

イタセンバラは二枚貝の中に卵を産みつけるタナゴ類だが、餌が増えていく春に産卵する普通のタナゴと違い、秋に産む。稚魚が未熟なまま貝の中で冬を越す珍しい習性を持つ。1970年代からの河川改修などですみかを次第に失い、淀川水系では2005年を最後に野生種が消えた。ブラックバスやブルーギルなどの外来種による捕食がとどめを刺したという。

淀川の近くで育った上原さんは幼いころから魚に親しんだ。地元の水生生物センターに勤め、イタセンバラの繁殖などの研究に取り組んだ。センターの池には自然に近い状態でイタセンバラが飼われている。09年に淀川の環境の良さそうな場所を探して500匹を放流したが、定着しなかった。

そこで、かつてイタセンバラの聖地だった大阪市旭区の城北ワンド群で放流を検討した。ワンドとは淀川の川岸に沿って並ぶ池のような場所だ。水を抜いて調べると、すむ魚の9割が外来魚だった。09年から3年間、一部のワンドで徹底的に外来魚を駆除し2割にまで減らした。

だが、行政が短期間予算をつけて駆除しても、期間が終わればまた外来魚が増えてしまう。

ネットワークのサイト (<http://www.itsasenpara.net/index.html>) にイタセンバラの情報がある。「地元で国の宝が泳いでいることを市民に誇りを持ってほしい」

地元の人から「保護活動を手伝いたい」との声があがったこともあり、活動を市民に引き継いでもらおうとネットワークづくりを思いついた。環境保護団体や研究機関、企業なども参加する。寄付やイベントで人をかり出すなど、義務を課さないのが特徴だ。

13年10月、500匹をワンドに放流したところ、昨年まで3年間連続で繁殖が確かめられた。ネットワークによる外来魚駆除や清掃作業でも捕まるといふ。「これがイタセンバラですよ」と教えると、ボランティアで加わる地元の市民から歓声があがる。

今年度は大阪府守口市の庭窪ワンドでも同じ試みが始まった。「市民活動が広がってほしい」といふ。(鍛治信太郎)

絶滅危惧種、地域で守る